

# 「あなたには力がある」—レジリエンス元年—

～「第4回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」報告～

2015年8月1、2日 於 帝京平成大学

坂本英樹（どもる子どもの親、教員、NPO法人大阪スタタリングプロジェクト）

## はじめに

私たちは、ことばの教室や吃音親子サマーキャンプを通して子どもたちが紡ぎ出す言葉や語りのなかに「吃音とともに生きる」文化を発見し、触発されてきた。こうした経験、実践をナラティブ・アプローチ、当事者研究の角度から整理しようとしたのが、これまでの吃音講習会だった。

そこから見えてきたのは、吃音をからかわれ、音読や発表で苦勞する困難な状況の中にあっても、立ち直っていく、元気を回復していく子どもたちのサバイバルする姿だった。私たちは子どもたちが見せるこのしなやかな力は、精神医学・臨床心理学の領域で注目されている「レジリエンス」の概念として理解できることを知った。ナラティブ・アプローチに関する著作、翻訳を数多く出版されている、精神科医の小森康永さんから教示されたことだ。

今回の講習会は学校心理学のパイオニアである石隈利紀さんをゲストに迎え、「子どものレジリエンスを育てる」と題して、レジリエンスについて学び、幼児期・児童期の実践に活かしていくことを目的に開催した。

## 基調提案① 日本吃音臨床研究会 伊藤伸二さん

**ちょうど50年** 2015年は21歳の伊藤伸二さんが吃音が治らなければ自分の人生は始まらないと考えて、民間吃音矯正所・東京正生学院に入所してから、50年目にあたる。伊藤さんは、吃音と向き合った半世紀を振り返り、「どもる人よ、どもる子どもよ、どもりと戦うな。臨床家はどもりと戦う戦場へ子どもを追いやるな」と総括する。

吃音は戦えば戦うほど巨大になり、刃として自分自身を傷つけてしまう。自分自身でもある吃音との戦いは内戦となるからだ。伊藤さんと親交のあった、アメリカ言語病理学の泰斗となったチャールズ・ヴァン・ライパー、弾けるラップで一世を風靡したスキャットマン・ジョン、現代イギリスを代表する作家、ディビッド・ミッチェルも同様の経験をし、述懐を述べていることである。

東京正生学院で一所懸命に当時最先端といわれた吃音治療法に取り組んだが、伊藤さんをはじめ、

誰一人として治った人はいなかった。ここで伊藤さんは吃音を治すことは諦めたが、自分の人生は諦めなかった。どもる事実を認めるところから人生が開けてきたのである。

日本で初めてのどもる人たちのセルフヘルプ・グループである「言友会」を設立し、学校生活では避けていたイベントを企画すること、人との話し合いや交渉、リーダーシップを発揮すること等を経験した。また、生活を支えるための多種多様なアルバイトを経験することで「どもってできないことは何一つない」ことも知った。だから、どもる事実を認めて、吃音を生きよう、日常生活を丁寧に生きようと提唱する。人は吃音とともに生きていける存在である、そう基本設定されているという哲学を掴んだのである。

伊藤さんは吃音を超えて他領域からの学びと出会いを重ね、お互いに刺激を交流しあってきた。2011年の秋、吃音ショートコースに北海道・浦河を拠点とする社会福祉法人・浦河「べてるの家」理事の向谷地生良さんを迎えた。

向谷地さんが伝えてくれたのは、精神障害のある人たちが薬で症状を抑える、医療による治療という保護、管理から脱却し、自らの言葉で症状、課題を表現し、仲間と一緒に対処法を編み出す、「当事者研究」の方法だった。もちろん当事者研究で精神障害が治るわけではない。相変わらずトラブル続きの日常なのだが、自分の課題を自分のものとして引き受ける、べてる流に表現するなら「苦勞を取り戻す」ことを通して、べてるの家の人たちは人としての自尊心を回復していった。自分自身の人生の主人公になったのである。

向谷地さんとのワークショップを経験した私たちは、べてるの家の実践が大阪吃音教室での活動と同じ地平にあることを知った。私たちは治らない吃音を克服すべき課題として把握するのではなく、吃音をもつことの意味、吃音が私たちに何を問うているのか、生きるということはどう教えてくれるのかというテーマ性をもった課題として捉えた。大阪吃音教室はどもる人たちの当事者研究が交流する場であるとの確信を得ることができた。

べてるの家には「弱さを絆に」という言葉がある。弱さの情報公開が人と人をつなぐ絆という、ある意味での強さに転換することで、この表現に

は脆弱性モデル、ストレスモデルを超える発想がある。それは精神医学・臨床心理の世界において、心的外傷後ストレス障害（PTSD）だけでなく、心的外傷後成長（PTG）にも注目が集まりだしていることとも連動する思潮であろう。

**レジリエンスという視点から振り返る** 通称「カウアイ研究」で知られるレジリエンスの概念は、貧困や暴力などの逆境、困難の中でも、しなやかに回復していく、立ち直っていく力のことだ。小森康永さんから教示され、ニュージーランド在住の臨床心理士、国重浩一さんを2014年の吃音ショートコースの講師として招き、東日本大震災時の宮城県緊急派遣カウンセラーとしての活動を詳しく聞く機会をもったことで、伊藤さんの中で吃音を考える概念として新たな位置を占めるに至った。

言友会創立5周年、1971年の記念大会では「若者の明日を築くために」をテーマに「真の生きがいとは」との大討論会と題して、映画「若者たち」のスタッフとの討論等を実施した。どもる人である前に私たちはこの社会で生きる若者である、その課題を考えようとの主張は当事者グループのテーマ設定としてはかなり異質なものである。吃音自身の課題からは距離がある。どもる状態の変化に関わらず、セルフヘルプグループ活動を展開することで、伊藤さんたちが自らの人生を歩み出している実感、自信を得たがゆえのことだ。そこにはどもりに悩んでいた頃の社会人としての自分のイメージが持てなかった伊藤さんとは生き方の異なる、吃音とともに生きる姿があった。

伊藤さんはそれまでの活動が「吃音を治す、改善する」の言説にとらわれていたことに気がついた。吃音の課題はどもること自体にあるのではない、という洞察を得たのである。この洞察は1975年から翌年にかけて全国35都道府県38会場で実施した全国吃音相談会で確信へと変わった。どもる人、親、ことばの教室の教員等、600人ほどの人たちとの相談、質的な実態調査を通して、セルフヘルプグループや相談機関のない地域であっても、吃音で苦勞はしているが、明るく健康的に生きている、社会人としての責務をまっとうしている多くの人たちと出会った。悩む人が集まるセルフヘルプグループや吃音治療・研究機関の中にあるだけではわからなかった事実である。

吃音の課題はどもることではない。発声練習や呼吸法に注いでいたエネルギーは吃音とともに生きていくためにこそ使わねばならない。「吃音を治す努力の否定」の方向こそ、とるべき道であるというセルフヘルプグループの行動要領を伊藤さんたちは確立した。1976年の言友会創立10周年記

念大会では「吃音者宣言」が採択された。

セルフヘルプグループ仲間との当事者研究を通して、伊藤さんはウェンデル・ジョンソンの言語関係図やシーアンの吃音氷山説を知る以前に、それと同様の問題把握をしていたのである。精神医学、児童発達のS・J・ウォーリンとS・ウォーリンはこの問題の本質に気づき、掴む力である「洞察」をレジリエンスの構成要素のひとつに挙げている。伊藤さんの半世紀に及ぶ活動は仲間の力で当事者自身の中にあるレジリエンスを発見し、育む営為であると理解することができるだろう。

**3つの事実とレジリエンス** 100年の歴史をもつ吃音の研究と臨床を振り返り、伊藤さんは押さえておくべき事実が3つあると言う。

ひとつは、治療を受ける、受けないにかかわらず「治っていないという事実」だ。多少のコントロールはできたとしても吃音は治らない。治ったという人はコントロールをしているに過ぎない。むしろコントロールすればするほど、「もしも治らたら・・・」という不安は増すばかりだろう。

二つ目は「治療法がないという事実」だ。2012年、カナダのISTARという最先端の吃音専門治療・研究所で学び、言語聴覚士として働いた経験のある池上久美子さんを大阪吃音教室に招く機会があった。池田さんが説明してくれた、最先端と言われる方法が1903年に伊沢修二が薬石社で試みた「ゆっくり、そっと、やわらかく」の発声法とほぼ同じであったこと、ISTARで治療を受けた人はまたISTARに治療に戻ってくる、つまり100%再発するという。治療室のような管理された環境での訓練による吃音の変化は、その場限りのもので、日常生活で持続することはない。それはアメリカ言語病理学でも認めていることでもある。治療法があるというのは幻想だと、明らかになった。

人として、ライフステージごとの自らが課題に向き合うことで、自身の中のレジリエンスは育っていくだろう。そして、責任ある誠実な生き方、日常生活が結果として言葉の訓練となり、結果としてどもる状態は変化する。訓練によって変わるのではない。これはレジリエンスの、私たちは吃音を医療、病気の観点から捉えてはいないのでこの言葉は使わないのだが、あえて使うとすれば、「治療的」側面と言っていいたいだろう。

三つ目は「個人差が大きいという事実」だ。それはどもり方、どもる状態についてではない。吃音から受ける悩みとそれが人生に与える影響の個人差が大きいということだ。営業や教員、弁護士など話すことの多い仕事に就いている人がいる一方で、家族にさえ気づかれない程度のどもり方で

あっても深く悩み、人生に踏み出せない人がある事実だ。どもる状態ではなく、どもる人自身のどもりに対する意味づけ、考え方、態度がどもりからの影響を左右するのである。

言語関係図や吃音氷山説が提示しているのもこの事実だ。今多くのどもる子どもは学童期ではなく、幼児期に自分の話し方に気がついている。だとするならば、幼児の頃から言語関係図の Z 軸にあたる、本人の吃音に対する態度、意味づけ、吃音氷山説でいうなら海面下の人と話すことから逃げる行動、吃音は劣っているとの思考、どもると惨めという感情、人と触れあうことを避ける身体について考える機会をもつことが必要だろう。吃音を否定的なものとして捉えることなく、自分の言葉の特徴を聞いてくる友だちにどう伝えるのか、からかいにはどう対処するのか。これは広義には教育の営みに求められる課題である。親やことばの教室の教員が子どもとともに考えることである。レジリエンスはこうして育まれていく。これはレジリエンスの予防教育的側面である。

**いくつかの物語、語り継ぐ物語** セルフヘルプグループに関わる人たちは神学者ニーバーの「変えることができるものは、変えていく勇気を 変えることができないものは、それを受け入れる冷静さを 変えることができるかできないか、見分ける知恵を」の言葉を大切にしている。治らないものを治そうとすることが、どれだけ当事者の自己肯定感を損なうものであるのかは、見通しのない吃音の改善治療に動しんだ経験をもつ人の多くが知るところだ。変えることのできない、どもる状態の変化に拘泥するのではなく、変えることのできる氷山の海面下の部分にこそエネルギーを注ごう。そのための勇気をもとう。ニーバーから私たちが繰り返し、教えられていることである。

2013 年、北海道で看護師が職場で自分の吃音が理解されないことに悩んで自死した。地元北海道新聞だけでなく、朝日新聞の全国版にも大きく取り上げられた出来事だった。大阪スタタリングプロジェクトの青年は、消防学校の教官から、返事や報告でどもると、「そんなことで都民の命が守れるのか」と叱責されながらも懸命に技術習得と訓練に励み、現在消防士として活躍している。この二人を分けるものは何なのか。グループとの関係性やレジリエンスの観点を含めて、考えたい。

27 回を迎える夏の「吃音親子サマーキャンプ」で伊藤さんが出会った数多くの子どもの中で、強い印象を伊藤さんの心に刻んだ一人に宮城県女川町の阿部莉菜さんがいる。初めての参加は小 6 の時。キャンプでの話し合いの時間にいじめに合い、

不登校になっているつらい気持ちを涙ながらに話す彼女に、同じ年代の他の子どもたちが次々と質問をする。質問に答えることで自分の考えや感情が整理されるのだろう。阿部さんの表情が変わっていったと伊藤さんは証言する。もし、彼女のつらさへの共感的な質問だけだったら、一時的に気持ちは解放されただろうが、つらい感情はより強化されたに違いない。子どもたちの質問はナラティブ・アプローチという「無知の姿勢」「ユニークな結果」に基づくような質問だったのだろう。「莉菜ちゃんはいらいね。自分を変えよう、何とかしようと思ったから、お父さん、お母さんに頼んで、遠くからここに来たんだね。それはすごい力だよ」という彼女の真の願い、ニーズを証する、プレゼントのような言葉を受け取ることができた。

話し合いの翌朝に阿部さんが書いた「どもってもだいじょうぶ！」という作文には、父親の「どもりもりっぱな、いい大人になるための、肥料なんだよ」というキャンプへと彼女を誘った言葉と友だちとの対話から気づいた「どもりを私のとくちょうにしちゃえばいいんだ」という具体的な選択肢、対処法まで記されている。キャンプに参加するまでの吃音といじめに関する支配的なストーリーが、話し合いを経験することで、それまでとは異なる新たなストーリーとして語られ始めている。キャンプから戻ると、キャンプ以前と何ら変わることはない、厳しい環境のままである学校に彼女は戻った。不登校は解消された。

当時の阿部さんは言葉こそ知らないものの、キャンプで自分の中にあるレジリエンスに気づき、それを認めてくれる親や同じ課題をもつ仲間という証人を発見できた。レジリエンスは個人に備わる資質なのではない。同行するものとの関係性によって育まれていくものだ。同行者がいれば子どもは生きる力を発揮していく。レジリエンスモデルは脆弱性モデルと異なり、子どもという存在を信頼するところから始まる。親、教員、言語聴覚士の役割、立ち位置はここにある。これは希望する高校への入学を待つばかりだった 2011 年 3 月、東日本大震災の大津波で命を落とされた、阿部莉菜さんとお母さんが私たちに残してくれたメッセージ、阿部さん親子の物語を、伊藤さんが語り続けていくことを使命とするメッセージである。

**講義 「子どものレジリエンスを育てる」**  
筑波大学副学長（当時） 石隈利紀さん

**テーマ設定** 石隈利紀さんは教育相談、特別支援教育の領域において、保護者や教員、カウンセラー等がチームを組んで子どもに心理的・教育的援

助を行うという学校心理学を専門としている。チームでの関わりを大切にしている石隈さんは、人は自分の強みやツールを活かして、他者とつながり、レジリエンスを育てていく存在であるから、バブル景気の時代に言われた「自分探し」という青い鳥を求めるのではなく、「自分を育てる」という視点からレジリエンスを考察しようと提案する。

**レジリエンスの背景** 生命倫理学、現代哲学の森岡正博は「無痛文明論」(トランスビュー)で、現代の快樂、快適さを与え続ける文明を、私たちの生から苦しいことやつらいこと、痛いことを遠ざける仕組みや技術を限りなく発展させる「無痛文明」と名づける。この文明は私たちに清潔で利便性の高い生活を提供してくれるが、それは生きることの深い喜びや手触り、手ごたえが欠けている空虚な社会でもあると論じる。

児童期・学童期は小さなトラブルに満ちた時代で、親は我が子がすくすくと成長することを望むだろうが、そうはいかない、小さなトラブル、危機が起こることが通常だろう。親は子どもがつまづかないようにするのではなく、本人や周囲と相談しながら小さな痛みと向き合い、つき合っていくようにすることが子どもの他者への共感性やレジリエンスを育てることになる。無痛文明は子どもの成長にとってはマイナスの環境なのである。

当事者と専門家との関係を典型的に考察してみよう。過去は、問題のあると考えられる人に専門家が権威をもって対処する社会であった。患者と医者というタテの関係だ。セカンドオピニオンの考えられない社会である。現代社会は消費者王国、金を払うものが偉いという資本主義社会だ。消費者からの過剰なクレームは今や社会問題だ。保護者に向き合う前に、弁護士に相談する学校がある社会だ。私たちの築きたい未来は当事者と専門家がパートナーシップを結ぶ社会、対等な関係をもとに同行していく社会である。役割としてはタテでも人間としては対等なヨコの関係、気兼ねなく意見が交わせるような関係を志向したい。べてるの家の実践がその世界を私たちに開示してくれている。ここにこの社会の可能性を見たい。

レジリエンスは「当事者の力や可能性への敬意」が担保される対等な関係性の中で発揮される。それは数多くの相談者、クライアントと向き合ってきた石隈さんのカウンセラーとしての姿勢であり、大震災以降の福島での活動を支える哲学である。

**福島から考えるレジリエンス** 石隈さんは震災以降、年に数度、福島を訪れている。被災地の子どもたちの困難さは今も続いているし、ストレスは

蓄積されているだろう。しかし、人々は懸命に日常生活を取り戻そうと努めている。

石隈さんは「福島の小・中・高校生へのアンケート」に「学校のこと、家のこと、近所のこと、どんな小さなことでもかまいません。大震災以降の、あなたの『小さな一歩』について教えてください」という項目をつけ加えた。それはこうした経験の中にある当事者の工夫や対処を生み出す、宝のような強みというかレジリエンスをフィードバックすることが、人々への応援になると考えたからだ。人は自分の強みを活かして問題に対処する方法を編み出し、成長している。しかし、渦中にある人は案外と自身の頑張りや力、レジリエンスに気がついていないものである。子どもたちが自身や周囲の力を借りてどんな対処をし、一歩を踏み出したのか。石隈さんが心理職の専門家として、震災から学んだのは、子ども自身の一歩をとるに祝うということであった。伊藤さんの言う「小さな援助」に通じる視点だろう。

レジリエンスを援助資源と自助資源の認知と活用という側面から考えた時、家庭や学校、地域は環境の力と位置づけることができる。学校や家庭内での規則や生活が安定していること、友だちや教員のサポートがあること、隣人や地域の専門機関のサポートがあることなどが挙げられる。伊藤さんが紹介した阿部莉菜さんにとって吃音親子サマーキャンプは、阿部さんのレジリエンスを刺激した環境、「場の力」を発揮する装置として作用した。彼女はそこで対等な仲間とどもりと向き合う中高生や大人というよき先達、メンターと出会った。ロールモデルを発見したのだ。年に一度きりの機会だが、阿部さんの中にはこうした援助資源に支えられているという感覚が持続していたことだろう。キャンプに参加する子どもたちの多くが証言する感覚である。

カウンセリングの「問題を解決するためにその人のもつ力、あるいは潜在的な力を発見して、活用していくプロセス」という定義にある潜在的な力とは、個人の強み、自助資源のことである。自分の感情を表現し、コントロールする力であり、「自分なりにやっているな、向き合っているな」という自己効力感、「どもりカルタ」にあふれるようなユーモアなどであるが、私が石隈さんの表現で深く了解したのは「自分の言葉で、言語化する」である。「小さな一歩」アンケートの意図はここにあるのだろう。べてるの家の当事者研究が当事者自身をエンパワメントするのも、この言語化する力によるものだ。ナラティブ・アプローチに私たち大阪吃音教室が注目する理由もここにある。

**レジリエンスを育てるために** ウォーリン夫妻は「サバイバーと心の回復力」(金剛出版)において、レジリエンスの構成要素として、「洞察」「独立性」「関係性」「イニシアティブ」「創造性」「ユーモア」「モラル」の7つを挙げた。伊藤さんはこれに人と自分を大切にするコミュニケーションのあり方である「アサーション」と豊かで有意義な人生を送れる「楽観的人生観・人間観」、そしてアドラー心理学の「共同体感覚」を加えて、これまでの実践をこの要素に基づいて整理しようと提案する。

石隈さんはレジリエンスを育てる観点から、伊藤さんのこれまでの実践の中から「論理療法」と「当事者研究」、「アサーション」の3つを紹介する。いずれも金子書房の書籍となっている。論理療法は他ならぬ石隈さんとの共著である。

さて、震災後、石隈さんは改めて学校のもつ場の力を発見した。授業が再開される、友だちと遊ぶという、安心・安全な環境で日常生活を取り戻していく中で子どもは元気になる。以前にできていたことが今日もできた、明日もできそうだという自己コントロール感が伸びていく。また、震災前と同じ規模は無理でも、運動会のような行事の開催は子どもだけでなく、大人、地域も元気にしていく。行事や祭はハレとケを経験することで自分の気持ちを表現する機会となる。回復過程の中で悲しみに一区切りをつけ、日常生活に戻ることは自分に起こったことを受け入れ、整理する「喪の作業」になるはずだ。行事に関しては、3月11日というようなエポックとなる日が近づくと悲しみが増していく「記念日現象」が懸念されるが、心配してくれる大人やメンター、一緒に過ごす友だちの存在が支えてくれる。環境、場の力は基盤であり、それに支えられて子どもは工夫し、頑張りを見せる。

レジリエンスを育てることを石隈さんは「自動充電システムを育てる」と表現した。子どもの語り、気持ちに耳を傾け、同行者として行動する、フィードバックをする。時には同行者もメンターとして自身のことや気持ちを率直に語ることも大切なことだ。そして、子どもの小さな一歩をともに祝おう。これは援助役割を担う人が燃え尽きないための原則でもあり、こうした機会は家庭や学校には一杯あるはずだ。子どものレジリエンスを発見し、伸ばしていこう。小さな援助を基本に危機感と責任と希望を共有して、子どもと同行しよう。合言葉は「自分が資源 みんなも資源」だ。

対談 石隈利紀さん & 伊藤伸二さん

**ナラティブの再構成** 伊藤さんは21歳までの人生

は暗く、どもりを治すことを諦め、セルフヘルプグループを作ってから的人生は一転して明るくというストーリーを繰り返して語る。語り続けることでこのストーリーは伊藤さんの中でより語りやすい、納まりのよい物語になっている。しかし、強化されたストーリーはまだ語ることもない、オルタナティブな物語を隠蔽する働きをもってしまふ。石隈さんという良き聞き手、インタビュアーは、この、まだ生成されていないストーリーを明るみに出そうと努めるとともに、伊藤さんの物語、語りをウォーリン夫妻のレジリエンスの構成要素に従って、位置づけ、再解釈をするというマッピングの時間にもなった。16年ぶりの密度の濃い対談であった。

2浪して大学に入った伊藤さんは高校時代を振り返り、盛んに「勉強しなかった」というが、読書好きの父親の影響もあり、音読は苦手でも本を読むことを好み、また映画好きな少年時代を過ごした。これで培った人生に対する読解力が、東京正生学院での同じどもる人との語り合いを通して、吃音の課題の本質を掴み、治すことを諦める「洞察」へと導いたと石隈さんは指摘する。

「吃音は隠さなくてはいけない」というとられから解放され、つらく悲しい出来事、失敗した体験の語り合いが、笑いや「ユーモア」へと転化する経験やどもりながらも社会人として生活している人たちと出会い、メンターとつながり、「関係性」をつくるのがセルフヘルプグループ創立へと伊藤さんを導いた。そしてグループでの活動を通して「独立性」と「イニシアティブ」が鍛えられていく。グループ自身も成長した。

さて、伊藤さんは学資や生活のために、ありとあらゆるアルバイトを始めるのだが、こうして踏み出せた根拠を母親や初恋の人に愛されたこと、メンターと出会えたことというエリクソンの発達課題という「基本的信頼感」があったからと語るが、石隈さんはこの解釈にも一石を投じる。

伊藤さんは吃音への対処に明け暮れていた高校時代は暗黒で、よい記憶が一つもないというが、60歳になって同窓会にも呼ばれ、当時の思い出を語ってくれる人、好きだったと言ってくれた人と再会する。当時の記憶を包む箱の色が暗いだけで、実際にはいい経験もあっただろう。当時は受け止める余裕がなかったことなのだ。今の伊藤さんのレジリエンスにつながる経験なり、何かの要素があるはずだ。石隈さんはここから伊藤さんの新たな語りの可能性があるのではと予想する。

過去の事実は変わらないが、その意味づけは変えられる。物語を書き換えていくことで、私たちの人生は変わっていく。それはどもる状態の改善

とは関係のないことなのである。

**吃音と無痛文明** しかし、どもの状態にばかり焦点をあてる動きがある。発達障害者支援法に吃音も含まれることが周知されていくことを背景にして、いまや言友会は吃音の治療改善に完全に舵を切ったかのような印象を受ける。吃音で困っているので、この状態を少しでも減らさなければならぬの考えは無痛文明的発想で、医療モデルに依拠してしまっている。彼らは感染症のように吃音と向き合うのだろうか。吃音はどもの状態が軽くなるほど、隠せば隠せるほど、悩みとしては深くなり、予期不安や場面恐怖は増していく。これらに対処するために医療の世話になる、薬でも飲むというのだろうか。

レジリエンスは教育と相性のよい概念である。教育モデルで吃音の課題を考えると一次的な予防としては、子どもの世界にトラブルは常に起こるものだから、それへの対応力をつけようとする。友だちからの素朴な疑問やからかい、真似への向き合い方や吃音の基礎知識を身につける。特に学年、クラスの変わる新学期の前後は丁寧にことばの教室で取り組みたい。二次予防は吃音を否定的に捉えることで起こるマイナスの影響の副作用を予防することだ。このための創意工夫とサバイバルの中に子どもの「創造性」が発揮されていく。

丁寧に誠実な生活の中で自然と変わるのが吃音だ。結果として変わるのであって、軽くなること、変わることを第一義とはしないということだ。「吃音を治す努力の否定」は、人生にはどもの状態ではなく、向き合うべきもっと大きな価値、課題があるはずだ。自分のエネルギーの許容量を考えて、有効に配分しようとのメッセージなのである。

石隈さんはそうしたエネルギーの使い方を映画「釣りバカ日誌」の釣りも家族も仕事も大事にする主人公のハマちゃんを例に紹介した。伊藤さんは子どもの生活で、自信となるものを見つけたより、夢中になれることを見つけようと提案する。

最後に石隈さんが私たちに送ってくれたエールは、企業化された現代社会に生きる教育関係者は、あることの情報入力、インプットに対する出力、子どものアウトプットを評価しがちだが、その後の結果、効果であるアウトカムこそ評価すべきだという視点だ。何らかの働きかけによる一時的などもの状態の変化より、子どもの人生がどう豊かになっているのかという長期的な視野をもって同行することが大切なのである。これは子どもと関わるすべての人がもつべき「モラル」なのである。

## 基調提案② 「レジリエンスと関係論」 国立特別支援教育総合研究所総括研究員 牧野泰美さん

**牧野少年のレジリエンス** 特総研で言語分野の研究職にある牧野泰美さんは、現在ならおそらく「選択性緘黙」と呼ばれたであろう学童期を過ごした。家では話せるのに学校ではなぜか話せない。クラスの友だちは間違っているも無邪気に答えているのに、正解がわかっている自分は手を挙げることができない。先生は優しく発言を促すが、笑われたり、バカにされたりしないという保証はあるのか。先生は自分のことを語っているのか。もし、そうなら僕も話せるかもしれない。

こうした気づきや疑問が、関係論的な視点からどもの子どもの臨床を考える牧野さんの研究スタイルにつながった。幼い頃の洞察は牧野少年のレジリエンスであり、その後の教員や研究者として出会った人との関係の中で育てていったものだ。

**ことばの教室の役割** 子どもが何かの苦手を克服したということは喜ばしいことだと誰もが思うことだろう。しかし、何かを克服しない限り、その子どもは幸せになれないと考えるならどうだろう。吃音が改善されない限り、子どもは幸せになれないのだろうか。スピーチの流暢さにこだわる吃音臨床の危険性がここにある。

ことばの教室は言葉に何らかの課題があり、それによって生きづらさを感じている子どもに対して、どうやって生きていくのかを教員と一緒に考えていく、「生き方研究所」であると定義しよう。学校生活の中での頑張りどころと、頑張らなくてもいいところを見きわめて、子どもができる工夫を考え、検証する。言葉で苦勞をすることはあっても大丈夫、日常をサバイバルできると自分を肯定的に受け止めることができるように研究する場、レジリエンスを育てる場なのである。そう考えるとことばの教室で取り組めることはたくさんある。

子どもも関わる私たちも自分らしく活き活きと生きたいという願いは共通する。だが、私たちはともすれば自分のものの見方を子どもに押しつけてしまうことがある。その結果、子どもはその見方で自身を判断してしまう。私たちは自分のもつ「ねばならない」思考を解体することで、ゼロの地点に立つ必要があるだろう。そこから紡がれる関係性の中でレジリエンスは育っていくのだから。牧野少年に担任や友だちからの「黙っていてもいいんだよ」というメッセージが届いていたら、話せていたかもしれないのである。

### 基調提案③ 「つながりのちから」 神戸市立本山南小学校そだちとこころの教室 桑田省吾さん

**震災の経験から** よく泣く子ども時代、うまく人と話せずもんもんと過ごした青年期を経て、教員となって 10 年後、36 歳の年に桑田省吾さんはことばの教室の担当となった。そこでのどもる子どもと親、吃音との出会いを通して、桑田さんは自分自身の言葉との格闘、問題がどもりであったということを知った。

この年、阪神淡路大震災。全国各地から多くの支援者が集まり、桑田さんも神戸市の教員として多様な支援活動に参加する。その過程で桑田さんが見たのは、復興が最優先されていく中で被災者の間に広がっていく閉塞感であった。震災初期の手探り状態の支援から、だんだんと手厚く、継続的な支援が整っていく中でいつしか支援者役割と被災者役割が固定されていき、支援への依存というリスクを生み出しているという現実であった。「支援する側の自己検証」のない支援は当事者をエンパワメントしないという視点は、桑田さんにことばの教室での実践を振り返らせることになる。

**吃音親子のつどい** 通級指導終了後のアンケートを見ると、構音障害に比べて吃音の親子の満足度はかなり低い。それは子どもの「すらすらと話せるようになりたい」という wants 中にある「友だちと楽しく遊びたい」という needs に十分に引き合っていないからだろう。wants に焦点を合わせれば、ことばの教室は「養護・訓練」の場となる。子どもの今の力を前提にできることを探っていくことが自分らしく生きること、「自立」につながるのではないか。私たちは古い支援観から、まだ自由になれていないようである。

桑田さんは今、通級とは別に「ほおーっと」という親子の集いを年に 11 回、開催している。ただし、場を設定しているだけで桑田さんは何もしない。主体は参加者である。この「気楽な私たちとゆるいつながり」は子どもたちの、この場なら自分たちで何かできそうだという自己効力感を育てる仕掛けである。こうした対話のできる関係性は子どもたちの自分らしい生き方の探求を促し、メンターとの出会いを用意する。仲間認められ、自身のもつ力、レジリエンスに気づいていく、子どもたちのセルフヘルプグループなのだ。「あなたはあなたのままでいい あなたはひとりではない あなたには力がある」という伊藤さんの言葉そのままの風景がそこにある。

### 参加者とともに～幼児期・学童期の実践～

**臨床とは対話である** これまでの議論をまとめると、ことばの教室は吃音について学び、それを通して生き方を研究し、日常生活へと子どもを送り出す場だと整理できる。方法論は担当教員との絶えることのない対話だ。対話は現実を解釈する営みであると同時に、他者とともに現実を構成しようとする営みでもある。繰り返される対話自体が子どもの主体性とレジリエンスを育てる。

対話の前提として、伊藤さんは対等性を強調する。知力、体力、人生経験に差はあっても、人間としては対等だと哲学が対話へと私たちを誘う。対等性のないところに双方向の対話は成立しない。同行者とは対話をする者のことだ。子どもは自分と真摯に向き合う大人の存在に励まされ、自分の価値を信じ、肯定感をもつことができる。一方通行の関係性の中では人は変わらない。変わる契機があるとすれば、相互の信頼関係の中でしかない。

**子どもへの信頼** この講習会の少し前に大阪で開いた「どもる子どもの親と臨床家のための吃音相談会」に参加したある保護者が、「どもりを友だちからからかわれ、発表で苦労しながらも、毎日学校に行く子どもを尊敬する。私だったらとても行けないだろうと思う」と発言した。この保護者の誠実な姿勢に学びたいと思う。子どもは親や教員が教える前に、幼い頃から自分の言葉の特徴に気づき、いろいろと考え、工夫し、サバイバルしている。尊敬に値する姿ではないか。そんな子どもを信頼しよう。だから、「どもっているから可哀想だ」と思わないでほしい。その親の悲しげな眼差し、気持ちは子どもに確実に伝わるからだ。やがて、子どもは親を悲しませる残念な私、否定的な自己イメージを形成してしまうだろう。ここから、どもる事実を認め、歩み始める「ゼロの地点に立つ」にはどれだけのエネルギーがいることか。

子どもは吃音をテーマに生きている。親にできることがあるとすれば、子どもが自分の言葉の特徴を「なぜ？」と質問してくる時に備えて、吃音の知識、哲学を学ぶことだ。親はこの学びを通して、どもる状態の変化に一喜一憂することのない姿勢を身につけることができるだろう。親の肯定的な姿勢は子どもに安心感を与え、友だちとの遊びや学校生活へと歩み出す力を与えてくれる。レジリエンスの基盤はこの基本的信頼感なのである。